

# 論文内容の要旨

---

---

申請者氏名 福本 章

論文題目 芸術系大学卒業生の就業におけるキャリア・トランジションの研究

-就業者のライフヒストリーからキャリア教育への展望-

芸術系大学では、卒業しても芸術家として生きる者は一握りであり、大多数が卒業後に何らかのキャリア・チェンジを体験しているものと推察される。しかし、この視点から就業者の実証分析を行う研究論文は存在していない。

本研究は、芸術系大学を卒業した就業者のキャリア・トランジションについて、理論的にかつ実証的に明らかにすることを目的としている。研究対象は、芸術系大学卒業生のキャリア・トランジションである。調査対象は、芸術系大学を卒業し3年以上が経過した就業者である。あるいは芸術家以外の何らかの手法で生計を立てている社会人である。

調査に際して採用した方法は、公表されている文献や Web 情報、教育関連資料を渉猟する文献調査、質問票によるアンケート調査、及び許可を得た就業者へのインタビュー調査である。

文献調査は、基盤となるトランジション理論を整理し、日本におけるキャリア教育との関わり方について、多角度からデータを収集することが目的であった。

質問表によるアンケート調査は、芸術系大学の卒業生が、芸術家ではなく就職を選択した際のキャリア・トランジションの有無と、その克服について統計分析を行うことを目的とした。質問項目には、トランジション理論に基づく選択肢を設定した。アンケートは、

2019年3月から、知人の紹介とSNSにより募集を行い、同年5月末までに46名の回答を得ることができた。知人を介した紹介では、大学の専攻が、多種多様なものになるよう依頼した。

就業者へのインタビュー調査は、定性的分析を行うことである。インタビューの対象者は、アンケート調査の46名から、許諾が得られ15名の調査対象者である。インタビューは、2019年7月から2020年2月の期間に実施した。

第1章、2章で以上の研究概要を示し、第3章で先行研究のレビューを行なった。まず第1に日本におけるキャリア・トランジション研究をレビューした。学生から社会人へのトランジション研究から、看護師のリアリティ・ショックを扱ったトランジション研究、また、Jリーガーが選手を引退した後のキャリア・トランジション研究をレビューした。第2に、起源となるトランジション理論を示し、本研究の理論的な基盤となる計画的偶発理論から、21世型のキャリア理論と称される、プロティアン・キャリア、キャリア・チェンジ理論、キャリア構築理論をレビューした。第3に、日本におけるキャリア教育の視点から、教育現場において重用されているキャリア理論についてレビューした。

第4章で実証的分析を行った。定量的分析では、芸術家へのこだわりについて、年齢が高くなるに伴い、在学中からの芸術家へのこだわりが強く、また芸術の技能を活かす就業に就いている傾向が明らかになった。トランジションの克服については、「時間の経過による解決」14名、「価値観の変化」25名、「他者からの支援」0名、「能動的な自己変革活動」21名であった。また、キャリア・トランジションでは、「人間関係の変化」10名、「家庭生活での変化」16名、「個人的変化」5名、「仕事や経済上の変化」2名、「精神的変化」13名であった。実証的分析による結論は以下の5点である。

①芸術系大学生を卒業した就業者は、一般に転職回数が多い。しかし、転職を通して専門関連技術を活かす職業に就くことができる事例が多い。芸術系大学の卒業生は、大学の

専攻にかかわらず、基本的にデザインなど芸術に長けた人材が多い。1990年代以降、デザイン分野は、デジタルコンテンツが主流となり、また2000年以降、インターネットに関係するデザイン技術が求められる職種が増え、2010年以降は、スマートフォンを中心としたゲーム業界でも、グラフィックデザインによる業務が急激に増えた。各産業において、グラフィックデザインに関する雇用が拡大した。

②トランジションの克服における「時間の経過による解決」とは、就職後に、就業先においてデザイン業務を任せられたり、新たに専門性を活かすことができる事業の立ち上げなどをきっかけとして、就業先に適合するケースなどが該当した。また、デザインに関する技能を活かせる他社への転職により、転職先に適合したケースである。次に、「価値観の変化」による克服とは、就業を通して、就業自体に遣り甲斐を見いだすことができた事例である。第1に、意図せず就業した会社や業務にもかかわらず、環境に適応し、遣り甲斐を見いだしたものである。第2に就職、転職も含めて、自身の専門性を活かせる業務に就くことができ、そこでプロとして収入を得ることができる事実、に、就業者としての遣り甲斐を見いだしたものである。また、「他者からの支援」により転機を克服したという選択肢（0名）という結果から、芸術系大学の就業者は、自立した思考、行動を好み、自己決定を行う性格特性が現れた事例である。但し、調査対象者は芸術家ではなく、就業を選択した者の特徴として解釈できるものとしている。また、「能動的な自己変革活動」による転機の克服からは、様々な自己啓発行動が明らかになった。デザインに関するIT技術を習得する行動や、新たな産業へ飛び込み、技術の習得に臨む事例などが該当した。

③キャリア・トランジションとして「人間関係の変化」を選択した10名は、転職による人間関係の変化を表したものである。転職の捉え方として、「仕事の変化」や「精神的な変化」などの選択肢がある中での回答である。「家庭生活での変化」を選択した16名

は、女性の意見では「結婚」であり、それに伴う退職、出産、そして「家族での生活」を表している。男性は「結婚」という言語での表現をされることはなかったものの、「家族を持つことでの社会的責任」から、仕事は「生活することである」という考えに変化したものである。また、「個人的変化」を選択した5名は、就職したことで、心情的に価値観が変化したものである。トランジションを克服した理由として「能動的な自己変革活動」と同種の変化を表している。これは、就職や転職をしたことによって、自己啓発や資格取得に臨む気持ちや、何らかの向上心を表したのである。「仕事や経済上の変化」を選択した2名は、転職によって収入が上がった事例、生活が安定した事例である。

「精神的変化」を選択した13名は、芸術へのこだわりが消失した事由である。就職したことでの発見、転職したことでの新たな遣り甲斐、結婚による価値観の変化などを、物理的現象ではなく、心情的な側面で説明したものである。

④芸術系大学の就業者のキャリア・トランジションは「転職」という行為自体がキーワードになっており、「転職」を「人間関係の変化」と捉えるのか、「精神的変化」として捉えるのか、個人が重視する主観によるものであった。

⑤「転職」が人生を良い方向へと転換させていることが明らかになった。その理由は、第1に、デジタルコンテンツ産業が台頭することにより、芸術的な技術を活かせる雇用が拡大したことである。第2に、芸術系大学の卒業生にとって、新卒での「就職」自体が、社会を知るステップとして位置付けられており、最初の「就職」によって社会を知り、次の「転職」が、生活するための「本当の就職」という位置づけであることが類推された。

以上の点から、第5章では芸術系大学に対する教育的な提言を行った。キャリア教育では、学生時代に就職のマッチングを重視することよりも、目標設定の変化を想定し、失敗を恐れずに挑戦していくことで可能性を広げる思考を育み、臨機応変な変化に対応してい

くためのコンテンツをキャリア教育のエッセンスとして求めることを提唱した。キャリア目標を達成する過程において、想定外の出来事の際に臨機応変に調査・分析を行なうことで目標を見直し、創発的に行動計画を再スタートさせる教育的方法論を示した。また、キャリア・ガイダンスにおける活用を踏まえ、創発的キャリア理論を可視化した概念図と、ガイダンス実施を想定したコンテンツに言及した。

第6章を結語とした。本研究の理論的貢献は、芸術系大学の卒業生に焦点を当て、キャリア・トランジションの検証を行なった点である。また、実証的分析において Bridges のキャリア・トランジション理論に基づく選択肢を設定したことから、Bridges 理論の「終焉」を「転職」と捉えた場合、移行期間の「中立圏」を経て、次のフェーズにあたる「開始」を「転職先での新たな技術への挑戦」や「新たな人間関係の構築」と捉えるプロセスを明らかにした点である。次に、Krumboltz 理論による「偶発的な変化をプラスに変換する5つの行動特性」について実証した点である。新しい産業において転職を成功させ、キャリアをプラスに転換させている事例から、5つの行動特性の内「持続性」、「柔軟性」、「冒険心」の3点について明らかにした。これらの視点からキャリア・トランジションを肯定的に捉えることで、次のステージへ移行するための目標設定を随時見直すことの重要性を示した。以上の分析結果を踏まえ、5つの行動指針を教育プログラムに組み込む「創発的キャリア教育 (Emergence career education ; ECE)」とする概念を提唱した。創発的キャリア教育は、Krumboltz の計画的偶発理論を基盤とし、Mintzberg の創発的戦略のプロセスをキャリア形成に当てはめることで教育的展開を行うものである。

本研究の限界と課題は、定量的分析のサンプル数 46、定性的分析のサンプル数 15 と少ない点である。また、キャリア教育理論を展開し具現化するためには、大学組織の改革に関する方法論が求められる事案となり、そのためには一般の社会経済の組織開発と同様に理論構築を行う必要がある。したがって、創発的キャリア教育は、計画的偶発理論、キャ

リア・チェンジ理論のメタ理論として、今後の展望との表記に留め、方法論を今後の課題とした。 (3,957 文字)

**【発表論文】**

・福本章（2020）「芸術を学ぶ大学生のキャリア・トランジションに関する一考察-ライフヒストリー法による調査を中心にして-」『吉備国際大学大学院社会学研究論叢』第 21 号、27-60 頁。

・福本章・佐々木公之・崔瑞弦・姜明求（2020）「創発的キャリア教育の蓋然性-キャリア発達理論に関する先行研究より-」『吉備国際大学大学院社会学研究論叢』第 21 号、61-82 頁。

・福本章（2019）「キャリア・トランジションの文献レビュー-リアリティ・ショックの探求を中心にして-」『吉備国際大学大学院社会学研究論叢』第 20 号、1-18 頁。

氏名	福本 章
学位の種類	博士（社会学）
学位記番号	博甲第 社-8号
学位授与の日付	2021年3月22日
学位授与の要件	学位規程第4条第3項該当（課程博士）
学位論文題目	芸術系大学卒業生の就業におけるキャリア・トランジションの研究 －就業者のライフヒストリーからキャリア教育への展望－
論文審査委員	主査：赤坂 真人 副査：姜 明求 副査：森井 康幸
<b>審査結果の要旨</b>	
<p>本研究は、芸術系大学を卒業した卒業生の就業後のキャリア・トランジションについて、理論的・実証的に明らかにすることが研究目的であった。調査対象は、芸術系大学を卒業し3年以上が経過した就業者、あるいは芸術家以外の何らかの手法で生計を立てている社会人である。研究方法は、公表されている文献やWeb情報、教育関連資料を渉猟する文献研究、質問票によるアンケート調査、及び許可を得た就業者へのインタビュー調査である。</p> <p>アンケート調査は、芸術系大学の卒業生が、芸術家ではなく就職を選択した際のキャリア・トランジションの有無と、その克服について統計分析を行なうことを目的とした。質問項目は、芸術系大学の卒業生に焦点を当て、キャリア・トランジションの検証を行なった。また、実証的分析において Bridges のキャリア・トランジション理論に基づく選択肢を設定し、Bridges 理論の「終焉」を「転職」と捉えた場合、移行期間の「中立圏」を経て、次のフェーズにあたる「開始」を「転職先での新たな技術への挑戦」や「新たな人間関係の構築」と捉えるプロセスを明らかにした。次に、Krumboltz 理論による「偶発的な変化をプラスに変換する5つの行動特性」に関する実証的分析を行った。新しい産業において転職を成功させ、キャリアをプラスに変換させている事例に基づいて、5つの行動特性の内「持続性」、「柔軟性」、「冒険心」の3点について明らかにした。</p> <p>第1章、2章では研究概要を示し、第3章で先行研究のレビューを行なっている。まず第1に日本における看護師のトランジション研究、Jリーガー選手のトランジション研究をレビューした。第2に、プロティアン・キャリア、キャリア・チェンジ理論、キャリア構築理論をレビューした。第3に、教育現場において重用されているキャリア理論についてもレビューした。</p> <p>第4章では実証的分析を行い、まとめている。質問票によるアンケート調査によって芸術系大学の卒業生が、芸術家ではなく、就職を選択した際のキャリア・トランジションの有無とリアリティ・ショックの克服について定量的分析を行ない、その現状を明らかにした。芸術家へのこだわりについて、年齢が高くなるに伴い、在学中からの芸術家へのこだわりが強かったこともあり、芸術の技能を活かす就業に就いている傾向が明らかになった。インタビュー調査では、芸術から就業というプロセスにおいて、リアリティ・ショックの存在を想定し、ライフヒストリー法で定性的な分析を実施し、まとめている。</p> <p>本論文は研究テーマの適合性、情報収集の適切性、引用方法の適切性、論旨の妥当性、新規性など、すべてにおいて博士論文の基準を満たすものと判断される。本論文はキャリア・トランジションの研究に一つの布石を残す研究として評価されるべき秀作であると考えられる。</p> <p>しかしながら本研究は定量的分析と定性的分析のサンプル数が少ないことを、今後の課題として残った。本審査委員会は一致して、福本章氏が提出した学位論文を、吉備国際大学社会学研究科社会学専攻の博士(社会学)の学位を授与するのに値するものと評価した。</p>	